

# 『世界の中心で、愛をさけぶ』論

—アキがいる世界、いない世界—

A Study on *Crying out Love in the Center of the World*: Aki is 'to be or not to be'

柄澤 尚美

Naomi KARASAWA

## 1

『世界の中心で、愛をさけぶ』（片山恭一著・小学館・二〇〇一年四月）は「ぼく」こと松本朔太郎と白血病によって若くして命を落としたその恋人・アキの関係を描いた小説である。一九九八年に「恋するソクラテス」というタイトルで出版社に持ち込まれるものの、「売れない」と判断され出版には至らなかつた。その後、担当編集者石川和男氏によって再度「恋するソクラテス」が見出され、「世界の中心で、愛をさけぶ」とタイトルを改め二〇〇一年四月に小学館から刊行された。二〇〇四年五月に売上累計三〇六万部に達し、当時最多だった『ノルウェイの森』（村上春樹著）の二三八万部を

超えて国内作家の小説単行本売上トップに踊り出るといふ記録的なメガヒットを遂げることとなる。映画、コミック、舞台など多くのメディアミックスも為され、本作は多くの人々に親しまれるものとなった。

このようなメガヒットの裏で、本作は「文学」としては面白みが足りないといふ批判されることが多々ある。作家の黒井千次は次のような感想を『週刊朝日』で述べている。

それほど関心しなかつたんですね。純愛ばやりといつても、特別に優れているわけではなく、なぜここまで売れたのか理由がよくわからなかつた。新しい発見に乏しい気もした。悪くはないんだけど、小説としての面白みが何かもう一つ欲しかったと思います。たとえば、主人公が大人になって婚約者を連れて

故郷を訪れる場面。あそこをもっと膨らませたらいいと思っただがね。(『7つの疑問で読み解く『世界の中心で、愛をさけぶ』メガヒット現象』・週刊朝日・二〇〇四年五月七日)

このような意見があるものの、二〇〇三年四月には静岡県教育委員会調査の「私がすすめる1冊」の「高校生が友人にすすめる1冊」部門で第一位となるなど魅力を感じている人々が多かった。

本作の読者層の大半が中高生女子などの若い層であった。本作が出版された二〇〇〇年代とは、ケータイ小説の流行やインターネットの一般化といったことからわかるように、社会構造自体が激動した時代でもあった。このような状況下で、異例のヒットとなった『世界の中心で、愛をさけぶ』をただ「関心しな」い作品に留めてしまっているのだろうか。読者を惹きつける魅力がこの作品には隠されているのではないだろうか。

本作はアキの死後から小説が始まり、アキの生前を振り返っていく回想形式をとっているように見える。しかし、本作には回想形式では済まない構造が隠されている。本論ではその構造について考察を深めたいと考えている。

構造を考える上で、まず注目したい点が本作に流れる時間である。鈴木正和氏は『ジェンダーで読む愛・性・家族』(岩淵宏子、長谷川啓編・東京堂出版・二〇〇六年十月)の『世界の中心で、愛をさけぶ』の項で「(1) 恋人の廣瀬亜紀(アキ)と「ぼく」(朔太郎)との中学二年生の出会いの時から、高校二年生の冬に白血病でアキが亡くなるまでの約四年間の時間。(2) その数カ月後にオーストラリアに行き、アキの遺骨をアキの両親と一緒に朔太郎が撒ぎに行く時間。(3) アキの死から十年後に、朔太郎が若い女性と母校の

中学を訪れ、その校庭にアキの遺灰を撒く時間。」という「三つの時間の枠組み」が存在しているとされている。しかし、本作に流れる時間があると思われる。本論では大枠として(A)アキの生前(B)アキの死後(C)十年後の三つの時間の枠組みをもって考察していく。まず各エピソードを構成順に並べた図1と時系列順に並べた図2を提示する。

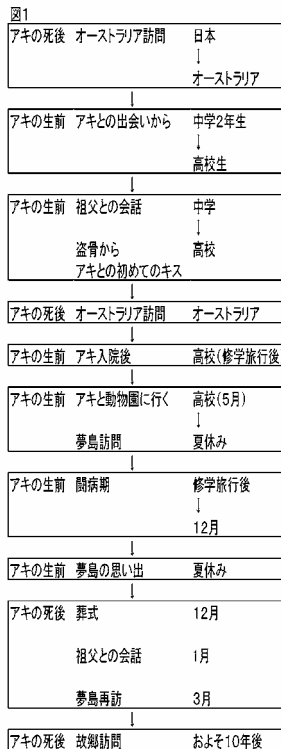


図2

時期	出来事
中学2年	1学期 サクとアキの出会い
	2学期 悪戯で鴨のリクエストハガキを送る。サクがアキを異性として意識し始める
中学3年	12月24日 別々のクラスになるが懇談は続く
	アキのクラス担任の葬式
高校1年	1学期 再び同じクラスになる
	2学期 祖父と暮を築く
高校2年	アキと初キス
	5月 アキと動物園に行く
	夏休み 夢島に行く
	アキの骨の盗り
	アキの骨の盗り
	アキの骨の盗り
	2学期 アキ病状悪化
	アキ病状悪化
	アキ病状悪化
	アキ病状悪化
高校2年	オーストラリアに行くことを強行
	12月 アキ死去
	アキ葬式
	1月 祖父との会話
	2月 オーストラリア訪問
3月 夢島再訪	
作中では語られない	
およそ10年後	3月 故郷訪問

図1と図2を比較すると、本作が時系列を大きく乱した構成をとっていることがわかる。また、図1を見ると(B)アキの死後のエピソードが(A)アキの生前のエピソードをはさみこみ、最終的に十年後のエピソードに至っていることが確認できる。この点を見れば、本作が回想形式であることは間違いない。

しかし、本作の構造は複雑で、問題はそれだけに止まらない。鈴木氏は次のように指摘する。

高校一年生の時の出来事が語られている(第一章・5)の末尾には、「われわれの人生だつてそうかもしれない、と何年もあとになってから思うことがあった。一人で生きる人生は、ただ長く、退屈なものに感じられる。ところが好きな人と一緒だと、あつと言う間に分かれ道まで来てしまうのである。」(第一章・5)という記述がある。翌年の冬にアキが亡くなっていることから、「何年もあとになって」から「ぼく」が回想することができるのは、アキの死から長い年月が経った後のことである。したがって、過去を回想している「ぼく」の現在とは、アキの死から十年を経た後の(3)以降の時間であることが推測される。また、(第一章・6)の冒頭には、「祖父はしばらくぼくの家で暮らしていたが、前にも書いたように、年寄りには住みにくい家だとか言つて、一人でマンション暮らしをはじめた」という記述がある。この物語が後年に朔太郎が書き記した手記であることが見えてくる。

この指摘からわかるように、本作は手記としての性質を持っている。つまり、前述の(A)、(B)、(C)の時間以外に、(D)手記を書いている時間が存在していることになる。それならば、本作は

すべて(D)の地点からの回想として描かれているのだろうか。しかし、本作の語りの叙述を見てみると、様々な時間に現在形が織り込まれている。その数は五〇〇例を超える。これらは(A)、(B)、(C)、(D)どの地点においても確認できる。その現在形は、語り手がまるでそれぞれの時間の中に生きていくかのように錯覚させるものだ。次にあげるのは、冒頭部である。

朝、目が覚めると泣いていた。いつものことだ。悲しいのかどうかさえわからない。涙と一緒に、感情はどこかへ流れていった。しばらく布団のなかでぼんやりとしていると、母がやって来て、「そろそろ起きなさい」と言った。(傍線部筆者)

傍線部の判断の明確な確かさは、この時点でのサクの現在が「朝に目覚めると泣いている」という日常的なイベントを果たした直後であることを規定している。このように、本作の語りはオーストラリア訪問の地点を物語の起点として、最初に提示しているのである。手記であるならば、なぜこのように語りの現在をオーストラリア訪問の地点にあると錯覚させるような書き方をしたのか。手記の性質は確かにあるが、それが表出する箇所は鈴木氏が挙げた二例以外にはない。なぜ語り手は物語を書き出すにあたって、その存在を直接的には描写しなかったのか。オーストラリア訪問の地点を最初に提示することで、手記を書いている地点を意図的に曖昧にしているようにさえ思える。

また、語りの現在をさらに曖昧にしている要素として、「いま」という語に注目したい。本作には、「いま」という語が十八例使われている。例えば「中学からはじめた柔道をあいかわらずつづけているらしく、いまではアーノルド・シュワルツネッガーのような体



図4

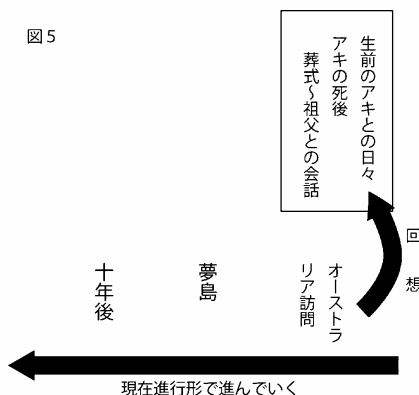
時期		出来事	
アキとの幸せな日々	中学2年 1学期	サクとアキの出会い	
	2学期	悪戯で噂のリュクスハイガキを送る。サクがアキを異性として意識し始める	
アキの死を見つめる日々	中学3年 12月24日	別々のクラスになるが難交は続く	
	高校1年 1学期	アキのクラス担任の葬式	
アキの死後	高校1年 2学期	再び同じクラスになる	
	夏休み	祖父と誓を繋ぐ	
		アキと初キス	
	高校2年 2学期	アキと動物園に行く	
		夢島に行く	
	10年後	夢島の掃りの船の故障	
		アキ発病	
		12月	オーストラリアに行くことを強行 アキ死去 アキ葬式
		1月	祖父との会話
	おおよそ10年後	2月	オーストラリア訪問
3月		夢島再訪	
作中では語られない			
おおよそ10年後	3月	故障訪問	

一章から三章まではアキの生前の幸福期(①)と闘病期(②)である。この中で唯一③区分のオーストラリア訪問が直接的に語られている。四章以降はほぼ時系列にそって物語が進んでいく。ここで疑問なのが、一章から三章まではアキの生前のエピソードを描く比重が高い中、それらのエピソードを挟み込む形でオーストラリア訪問時の「ぼく」がなぜ描かれなくてはならなかったのかという点である。

手記としての性質が本作に表れるのは、一章五節の最終段落と一章六節の叙述の二箇所であることは先述した。言い換えると、一章五節の最終段落と一章六節の叙述がなければ、この作品は「手記」としての性質を失う。

この二つの叙述を排除した際に語り手の現在となりうるのはどこか。冒頭部で語りの現在が規定されてしまっていることは先に確認した。このことから考えると、二つの叙述を排除した際に語り手の現在となりうるのはオーストラリア訪問時の「ぼく」の地点と考え

られる。オーストラリア訪問時の現在を起点とした場合、(A)生前のアキとの日々、(B)アキの死後・祖父との会話までを回想し、オーストラリア訪問から十年後に現在進行形で進んでいく構成を見出すことができる。(図5)



なぜオーストラリア訪問から十年後の期間が現在進行形で進んでいるとすることができているのか。それは、オーストラリア訪問から夢島再訪問・夢島再訪問から十年後の期間において、「ぼく」の内面に明らかな変化が起こっているからである。

オーストラリア訪問前の「ぼく」は一貫して無気力な状態である。それに対して、オーストラリア訪問後に訪れた夢島では、「ぼく」はインゲンチャクの鮮やかな色の触手に気づき、群生した松の枝の一本一本が美しいとまで言う。十年後においては、夢島再訪時に為しえなかつた散骨を行う。

このように、オーストラリア訪問をはさんだ前後において「ぼく」の心境は変化している。オーストラリア訪問を契機として、アキの死により停滞していた「ぼく」の内面が動きだしている。オーストラリア訪問とは「ぼく」にとってアキの死から立ち直る大きなきっかけであった。つまり、オーストラリアに出发する朝から始めるという構成から(D)地点にいる手記の作者である「ぼく」の意図が

読み取れる。

オーストラリア訪問時の「ぼく」とは、(D)地点の「ぼく」が手記の中に設定した語り手だったのではないだろうか。本作では(1)手記を書いた「ぼく」の現在、(2)手記中の語り部である「ぼく」の現在が大きな枠組みとして存在しているのである。しかし、それらがはっきりと分けられず、混在することで時間は複雑になっている。このように(D)地点の「ぼく」と手記中の語り手の「ぼく」が混在する形となる理由は何か。

第四章一節で「ぼく」は次のように語っている。

過去には、触ると血の出るような思い出が転がっていた。ぼくには血を流しながら、思い出ばかりを弄んだ。流れた血はやがて固まり、硬いかさぶたになるだろう。そうしたらアキとの思い出に触れても、何も感じなくなるのだろうか。

「ぼく」にとつて、時が経つことで「アキとの思い出に触れても、何も感じなくなる」ことは非常に恐ろしいことであった。アキの死から、最も離れた時間にいるのは(D)地点の「ぼく」である。しかし、(D)地点の「ぼく」は、オーストラリア訪問時の「ぼく」を語り手に設定して手記を書いている。このことは、「アキとの思い出に触れても、何も感じなくなる」というアキの死後直後の「ぼく」の不安をぬぐいさるものであると言えるだろう。

つまり、(D)地点の「ぼく」と手記中の語り部である「ぼく」の境界が非常にわかりにくくされているのは、(D)地点の「ぼく」が手記中の語り部の「ぼく」に寄り添うことによつて、アキの思い出に触れることの痛みを再体験するためのものである。

### 3

前節において、「ぼく」の内面の変化について触れた。その変化をより深く考察するため、「世界」という語に注目したい。

「世界」という語は二十一例登場する。それらをエピソードごとに分類した。

- |   |    |
|---|----|
| ① 周りの男子が自身に辛く当たる意味が分かった時<br>(アキ生前・中学生時代・幸福期)  | 一例 |
| ② 病院を抜けだした後の列車移動時<br>(アキ生前・高校生時代・闘病期)   | 七例 |
| ③ アキの葬式(高校生時代・アキの死後)  | 一例 |
| ④ 葬式後、新学期に入ってから生活<br>(高校生時代・アキの死後)  | 三例 |
| ⑤ 祖父との会話(高校生時代・アキの死後)   | 二例 |
| ⑥ オーストラリア訪問時(高校生時代・アキの死後)   | 三例 |
| ⑦ 夢島(高校生時代・アキの死後)   | 一例 |
| ⑧ 十年後(十年後・アキの死後)  | 三例 |
| ⑨ 二十一例のうち十三例がアキの死後のエピソードに登場する。残りの十例のうち、九例が三章五節で病院から抜けだした「ぼく」とアキがオーストラリアに向かう途中の列車内の会話に登場する。三章五節における二人の会話を起点として「世界」への注目度を高め |    |
| ている。  |    |
| それぞれの場面で「世界」はそれぞれの意味をもって使用される。一番早く登場した用例は次の通りである。   |    |

アルカリ性に反応した赤いフェノールフタレイン溶液に、酸性の液体を適量加えると、中和反応が起こって水溶液が透明になる。そんなふうにして、世界が晴明に澄み渡った。(傍線部筆者)

これは中学時代の「ぼく」が周囲の男子にきつくあたられる原因を理解した場面である。ここでの「世界」は、「ぼく」自身の主観によって形づくられた視界を表している。「世界」は、あくまで「ぼく」の精神や心持ちで変化するものであり、「世界」を規定するものは明確に存在してはいない。

「世界」という語はこの中学時代のエピソードからアキの死の直前に列車に乗るシーンまで出て来ない。それは列車内の会話にいたるまで「ぼく」が、「世界」について熟考する必要がなかったからである。

それでは列車内の会話で「世界」はどのようなものとして提示されているのか。

「アキの誕生日は十二月十七日だろう」

「朔ちゃんの誕生日は十二月二十四日ね」

「ということは、ぼくがこの世に生まれてからアキがいなかったことは、これまで一秒だってないんだ」

「そうなるかな」

「ぼくが生まれてきた世界は、アキのいる世界だった」

彼女は困ったように眉を寄せた。

「ぼくにとつてアキのいない世界はまったくの未知で、そんなものが存在するのかわりかさえわからないんだ」

「大丈夫よ。わたしがいなくなっても世界はあり続けるわ」

「わかるもんか」

〈中略〉

「わたしは朔ちゃんが生まれるまで待っていたのよ」穏やかな声でアキは言った。「朔ちゃんのいない世界で、一人で待っていたの」

「たった一週間だろう。ぼくはいつたいたどのくらい、アキのいない世界で生きなければならぬと思う？」

「時間の長さはそんなに問題かしら」彼女は大人びた口調で言った。「わたしが朔ちゃんと一緒にいた時間は、短かったけれどすごく幸せだった。これ以上の幸せは考えられないくらい。きっと世界中の誰よりも幸せだったと思う。いまこの瞬間だって……だからもう十分だわ。いつか2人で話したでしょう、いまここにあるものは、わたしが死んだあとも永遠にあり続けるって」(傍線筆者)

ここはアキが初めて「世界」の語を使った箇所である。そして、この箇所以外でアキは「世界」を使っていない。「ぼく」と「アキ」が「世界」について意見交換するのがこの箇所のみなのである。この会話が以降の「ぼく」が考える「世界」を定義づけていったことは明らかであろう。

ここで特に注目すべきは、「ぼく」が提示した「アキがいる世界」と「アキのいない世界」であろう。『謎解き』世界の中心で、愛をさけぶ』(ライターズ・ジム著・夏目書房)では、これら二つの「世界」について次のように述べている。(『謎解き』世界の中心で、愛

をさげぶ』は見崎鉄を代表とするライターズ・ジムを著者としており、協力として北迷真氏、長谷川樹氏が挙げられている。しかし、『謎解き『世界の中心で、愛をさげぶ』』におけるそれぞれの執筆箇所が明確でない。そのため以降、書名で引用を行う。

朔太郎にとって「世界」とはアキがいる世界でした。アキが「世界」に意味を与えていました。アキが死んでしまえば「世界」は終わりです。だからそこに残された自分はどこにいるのかわからなくなってしまうのです。

この指摘の通り、「世界」とはアキがいることによって定義づけられているものであることがわかる。「ぼく」が「わからない」と言うように、この時点では「ぼく」は「世界」を「アキ」の存在と接続して考えることしかできない。指摘されるように「ぼく」が言うような「アキがいない世界」とは、「ぼく」には「世界」となりえないものなのである。

これに対し、アキは「わたしがいなくなっても世界はあり続けるわ」と、「ぼく」の「世界」の概念をひっくり返す。アキが提示した「わたし」「ぼく」ととってのアキがいない世界は「ぼく」が言う「アキがいない世界」とは似て非なるものだ。なぜならば、「ぼく」は生きていくものとして、アキは死にゆくものとして、異なる立場から述べているからだ。

この立場の違いについて『謎解き『世界の中心で、愛をさげぶ』』では次のように述べている。

生き続ける朔太郎は死者の立場で「世界」は終わるといい、死んでいくアキは生者の立場で「世界」はあり続けるという。アキは「いつも一緒にいるから」と言います。同じように、朔太

郎も死んだアキと「いつも一緒にいるから」死者のように魂の抜け殻同然に生きてしまうのです。

この指摘は、一章一節の末尾における次の箇所によって裏付けられるだろう。

そういうことだ、アキがいなくなるといことは。彼女を失うということは。ぼくには、見るものが何もなくなってしまう。オーストラリアでもアラスカでも、地中海でも南氷洋でも。世界中どこに行こうと同じだ。どんな雄大な景色にも心は動かないし、どんな美しい光景も、ぼくを楽しませない。見ることに、知ること、感じることに……生きることに動機を与えてくれる人がいなくなってしまう。彼女はもうぼくと一緒に生きてはくれないから。

「見るものが何もなくなってしまう」ている状態は、すでに骨になることで体を失い、思考能力や視力等の五感もなくしているアキと同一状態である。この「ぼく」の行動は、精神的に体や思考能力、視力等の五感を失うことで、死んだアキと同一状態となること——「アキの死」を体験することなのだ。

片山のエッセイ『DNAに負けない心』（新潮社・二〇〇〇年十月）は本作よりも後に執筆されているが、本作の理解を深める理念が多く書かれている重要な著書である。片山は「死」について次のようにいう。

他者との関係は、私達が存在することの制御不可能な部分だ。だから他者との関係において経験される死を、私たちは自然科学的な事実には委ねずに、「わからない」と感じる。他者との関係において経験される他者の死も、他者との関係において経



験される自己の死も、同様に「わからない」と感じる。「わからない」という感じ方で、大切なものを損なわずにおこうとする。「わからない」という感じ方で、自然科学的な事実を超えた何かに触れようとしている。それは他者との関係、他者との結びつきによってもたらされるものである。

本作の内容にあてはめると、「ぼく」とアキの関係においてアキの死は、「ぼく」にとって「他者との関係において経験される他者の死」であり、アキにとって自己の死は、アキ自身の死であると同時に「他者との関係において経験される自己の死」である。

このようにあてはめた場合、列車内の会話で「ぼく」と「アキ」の新たな違いが浮き彫りになる。それは、「アキ」の死後の「世界」の予想がなされているか否かである。

アキの死を「未知」なものとして「アキがいない世界」についての予想を「ぼく」が提示しないのに対して、アキは「わたしがいなくなっても世界はあり続ける」と自身がなくなった「世界」についての予想を提示している。この予想は、他の生者の立場で自身の死後を想像することでのみ為し遂げられるものである。

列車内の会話で、この生者とは他でもない「ぼく」であり、アキの死後の想像とは、「ぼく」という存在に彼女自身を仮託することで為された死後の「世界」の擬似体験である。擬似体験を終えたアキが見た「世界」は、彼女自身がなくなっても有り続ける「世界」である。つまり、アキにとって「世界」は自身の存在を超越したものととらえられている。

先述したように、「ぼく」の「世界」はどれも「アキ」と結び付いている。ここで注意したいのは、列車内の会話で「ぼく」が使

う「世界」に結び付く「アキ」は、すべて生きている「アキ」だということだ。「ぼく」の「世界」を崩壊させるのは、生きている「アキ」の崩壊である。すなわち、アキの「死」を意味する。「ぼく」にとっての「世界」を考えることは、「アキ」を考えることである。また、「アキ」を考えることは、彼女の「死」を考えることでもあるのだ。

#### 4

「ぼく」にとっての「世界」を規定するに至った「アキ」、および彼女の「死」は、どのように扱われているのだろうか。その手掛かりとして、「アキ」という存在がどのように変化しているのかを確認したい。そこで、次のような区分を設けた。

- ① アキの生前
- ② アキの死後 — a, 葬式

—— b, 祖父との会話  
—— c, オーストラリア訪問  
—— d, 夢島再訪

#### ③ 十年後

「アキ」の変容を考える基準として、「生きているアキ」を設定する。これは①のアキの生前の区分内の「アキ」である。本節では「アキ」の死後である②③(列車内の会話中の「ぼく」)にとっての「アキのいない世界」に位置する区分)の「アキ」の推移を確かめたい。

② a において、アキは「遺体」「煙」の姿となっている。「火葬」

により「遺体」は焼かれて「灰」(骨)になる。しかし、この時点では「灰」は出てこない。出てくるのは「煙」である。「ぼく」は火葬場の煙を見て、「不思議な気分だった」と語っている。なぜ「不思議な気分」になるのか。

「煙」は「アキの身体」の焼滅をいち早く「ぼく」に知らせる。その「煙」とはただの「煙」ではなく、「世界でいちばん好きだった人を焼いた煙」である。「煙」は「アキの身体」の焼滅を象徴すると同時に、「世界でいちばん好きだった人」||「アキ」という存在の残り香をも有している。

「煙」が「灰色の雲に紛れて見えなくな」ることは、「煙」の中に感じていた「アキの存在」の喪失、即ち「生きているアキ」が「死」の世界へ行ってしまった事実を目の当たりにすることなのだ。

④ b において注目すべきは、「遺骨」「骨」という言葉だろう。第四章二節に次のような箇所がある。

「おじいちゃんの好きだった人の骨を一緒に見たあとで、ぼくたちははじめてキスをしたんだ。なぜかわからない。そういうつもりはなかったんだけど、自然とそういうことになってしまった」

祖父はしばらく黙っていた。それから、  
「いい話だな」と言った。

「だけどその彼女も、いまでは骨になってしまったよ」

これ以前にも会話中で「ぼく」は「遺骨」という言葉を口にする。この「骨」に至るまでの会話は、祖父が「ぼく」のオーストラリア行きを後押しするためのものである。オーストラリア行きの目的は、「遺骨」を撒くことであり、これは「生きているアキ」の喪失を象

徴する「骨」という存在と向き合うことである。つまり、この場面における「骨」の明言とは、「生きているアキ」の喪失を自覚することであり、「骨」になったアキの存在を認めることで、「アキ」を死の世界におさめることとなる。この時の「ぼく」にとつての「世界」は、「アキがいない世界」でありながら、「アキであったものがある世界」でもあった。

④ c のオーストラリア訪問時では、「アキ」をめぐる「ぼく」の感覚に変化が見られる。

大きく分けて、①冒頭部(オーストラリアへ出発する場面)→アキの両親と食事をする場面、②散骨場所に向かうランドクルーザーの中、③散骨時の三つの場面での変化が大きい。

ほんの四ヶ月、季節が一つめぐるあいだの出来事だった。呆気なく、一人の女の子がこの世界から消えてしまったのは。六十億の人類から見れば、きつと些細なことだ。でも六十億の人類という場所に、ぼくはいない。ぼくがいるのは、たった一つの死が、あらゆる感情を洗い流してしまうような場所だ。そういう場所にぼくはいる。何も見ない、何も感じない。ぼくがいる。でも本当に、そこにいるのだろうか。いないとしたら、どこにいたのだろうか。

①で特徴的なのは「ぼく」が感覚を失くしていることだ。「何も見ない、何も感じない」という状態は「死んだアキ」と同一状態である。「ぼく」の感覚の喪失とは「アキの死」の体験でもあった。この時点で「アキ」は確かに「死」にあり、「ぼく」はその「死」に近づくことで自身の「世界」の均衡を保っている。

彼女が逃げていく。世界の果ての、さらに、その先まで。追

いかけるぼくの足跡を、風と砂が消し去っていく。

第二章一節でも、感覚を失っている。「世界の果て」から「そのまた先」に逃げることは「世界」の枠組みから飛び出すことだろう。それは「生」の範疇を越えること、すなわち「死」なのだ。「ぼく」は自身の生きる世界の枠組みから外れたところにある。「死」に「アキ」を設定していることが読み取れるだろう。

しかし、この時点において「アキ」と「ぼく」は同一のものではない。

第二章一節に「過去でも現在でもないどこか、生でも死でもないどこかに、迷い込んでしまっているらしい」とあるように、「ぼく」が行っている「死」の体験は「死」に近づくのみであって、実際に訪れる「死」とは異なる。どんなに「死んだアキ」の状態に擬似的に体験しても、「ぼく」は生きている。「ぼく」は精神的な死への惑溺と生きている身体という矛盾を抱えることで、「死」と「生」を行き来し、「ぼく」自身と「アキ」の存在を行き来している。そのため「自分が誰かもわからな」くなってしまっているのである。

①の場面では「アキ」は「ぼく」の「世界」の枠組みから外れたところおり、「ぼく」はその枠組みから外れたところにいる「アキ」に近づくことで自身の「世界」を保とうとしている。

だが「アキ」の存在は②の場面で転換する。

オーストラリアまでやって来ても、アキが死んだという実感は得られなかった。どこかにいるような気がしてしまう。どこかで、ふと見かけるような気がしてしまう。

これまでの「アキ」が、「ぼく」の「世界」の枠組みから外れたところにあるととらえられていたのに対し、ここでは「ぼく」は自

身が生きる「世界」の枠組みの中に「アキ」を感じている。しかし、注意したいのはここで言われているアキはあくまで「生きているアキ」だということだ。「オーストラリアまでやって来ても、アキが死んだという実感は得られなかった。」という一言は、四章二節の祖父との会話で「こうやってでたらめにチャンネルをまわしているとき、亡くなった彼女が出てくるような気がするんだ」という「ぼく」の発言とよく似ている。この二つの発言に共通するのは、どちらも発言の前には「ぼく」が「アキ」の死に近づくような叙述が為されているという点である。葬式後、「ぼく」は「空っぽ」になり、オーストラリアに出発してから「自分が誰かもわからな」かった。「ぼく」が「アキ」の死を体験することは、擬似体験にすぎずその「死」を「ぼく」に実感させることができなかつたということだ。その「死」を「ぼく」に訴えるただ一つのものが、両方の発言の後に共通して登場するアキの「骨」（灰）なのである。

③の場面において登場する「アキ」とはアキの遺灰である。

掌に、ひんやりとした白っぽい粉があつた。それがなんであるのか、ぼくには理解できなかつた。頭では理解できても、感情がその理解を拒んだ。受け入れると壊れてしまいそうだった。凍りついた花びらを指先で弾くようにして、心が粉々に砕けてしまいそうだった。

「さよなら、アキ」母親の声がした。

白い灰のようなものが、両親の手から放たれた。それは風に乗って飛び散り、赤い砂漠に散らばつた。アキの母親は泣いていた。父親が彼女の肩を抱き、二人はもと来た道を、ゆつくり引き返しはじめた。ぼくは動けなかつた。赤い砂の大地に飛ん

でいったものを、まるで自分のかけらのように感じた。もう二度と広い集めることのできない、ぼく自身のように。

ここで重要なのは「ぼく」は遺灰を「まるで自分のかけら」のように感じているということだ。これまで「ぼく」は、「アキ」の「死」の立場に近づくことでその「死」を体験するばかりで、「ぼく」自身の生により添って「アキ」の死を体験することはなかった。しかし、ここで生きている「ぼく」はその手で、遺灰に触れている。生きている「ぼく」と死んでいる「アキ」が初めて触れあう瞬間である。ここではじめて、「ぼく」は自身の生に寄り添いながら「アキ」の死を体験することになる。

つまり、ここで言われている「自分のかけら」とは、「アキ」の死を擬似体験してきた自分自身を「アキ」の遺灰に投影しているということだ。「アキ」の死を経験する「ぼく」自身と最愛の「アキ」の遺灰が散り散りになることで、「ぼく」は「生きているアキ」がすでに存在しないことを実感する。この時点で、「ぼく」の世界を規定した「生きているアキ」は完璧に消滅したのである。

では、②dの帰国後の夢島再訪では「アキ」と「世界」はどのように変化したのか。

ぼくは学校への行き帰り、あるいは退屈な授業の合間に、何度となく空を見上げるようになった。ときには長い時間、ぼんやり空を眺めて過ごした。そして「あそこにいるのだろうか」と考えた。冷たい冬の光の名残りに、春の柔らかな日差しにも、空からやって来るものすべてのなかに、アキの存在が感じられるような気がした。(中略)

「彼女は死んだ。身体は焼かれて骨になった。その骨を、ぼく

はこの手で、赤い砂漠に撒いてきた。にもかかわらず、彼女はいるんだよ。いるとしか思えない。錯覚なんかじゃない。どうしようもない感覚なんだ。夢のなかで自分が空を飛んでいることを否定できないように、彼女がいることを否定できない。たとえ証明できなくても、彼女がいると感じていることは事実なんだ」

話し終わると、大きき痛ましげにこつちを見ていた。

「ぼくは夢でも見ているのだろうか」

オーストラリアでの散骨で「生きているアキ」が否定されたにも関わらず、「ぼく」は自身が生きる「世界」に「アキ」を感じている。夢島再訪時は「アキのいない世界」にも関わらず、「アキ」の存在を感じ取れるのである。

「ぼく」の困惑は大本に「夢でも見ているのだろうか」と問いかけたことからわかる。その困惑の理由は、「アキ」は死んだのに「アキ」を感じ取れる「自身の「世界」のあり方に、ねじれを感じているからである。夢島再訪時の「ぼく」にとって、「死」とは「彼女は死んだ。身体は焼かれて骨になった。その骨を、ぼくはこの手で、赤い砂漠に撒いてきた。」という発言から、身体の喪失と捉えていたことわかる。

ここで言われている「彼女がいる」感覚は、列車内の会話の「世界」を規定した「アキ」の存在基準を揺らがすものだ。この「ぼく」の感覚については、『謎解き『世界の中心で、愛をさけぶ』』において次のような指摘がある。

これまで、アキのいない世界には自分の居場所もないと感じていた朔太郎でしたが、ここでは存在の因果の先後関係が逆転

して、自分のいるところにはどこにでもアキがいると感じるようになります。アキは、夢島のような特権的な箇所点に点しているのではなく、この日常の世界の中に遍在している、ということです。

この指摘の通り、「ぼく」にとって「アキ」の存在は、身体に限定されずにどこにでもあるものである。「ぼく」はこのとき「アキがいる世界」でも「アキがいない世界」でもない、「実体のないアキがいる世界」へと足を踏み入れている。しかし、その新しい「世界」にいる「アキ」は、「ぼく」を困惑させるものであり、それがなにか「ぼく」は規定することができない。

それでは「実体のないアキがいる世界」に至った後、十年後の「ぼく」はどのような「世界」において、「アキ」をどのようにとらえているのか。

十年後を描いている第五章で、「ぼく」はアキと過ごした日々をとても遠いもの感じている。「世界」を規定していたはずの「アキ」は「時間を超えて」、 「遠い世界」の人となり、「ぼく」の「世界」を規定する基準ではなくなっている。しかし、「遠い世界」のアキはその後「ぼく」のなかに甦る。

そのとき胸の奥底に、ハリでつついたほどの小さな穴があった。それはブラックホールのように、一瞬にしてすべてを呑み込んでしまった。まわりの風景も、二人のあいだを流れた時間も。あれほど遠いと思っていた過去に吸い込まれるようにして、不意にアキの声が甦った。(中略)

耳のすぐそばで、彼女は喋っていた。懐かしい、あのはにかむような声で。やさしい心はどこにいったのだろう。アキとい

う一人の人間のなかに包み込まれていた美しいもの、善いもの、繊細なものは、どこに行ってしまったのだろう。夜の雪原を走る列車のように、明るく光る星の下を、いまも走りつづけているのだろうか。どこへも行方を定めずに。この世界の基準では測れない方位に沿って。

「ぼく」は時を超えて「耳のすぐそば」に彼女の存在を感じとる。この点について、大沢正善氏(『世界の中心で、愛をさけぶ』論)『岐阜聖徳学園大学国語国文学』二十六号・二〇〇七年三月)は次のように指摘する。

サクは恐らく、アキを忘れずに、逆にしがみつかず、その狭間を彷徨してきたが、思い出を風化させたことを自責しなくても、アキの心は「ふと」した時に、「なくしたときよりもかえって新しくみえたりするように訪れてくるのだ。

アキの死の直後の「ぼく」は、「アキ」を「世界」の基準として、それにとらわれて生きた。しかし大沢氏は、十年後、「ぼく」は「アキ」を基準とした世界に生きることを自身に強要しなくてよいことに気づいているという。アキは「ふと」した瞬間に「ぼく」がいる世界に舞い戻ることができる存在であり、「世界」の基準としてあるものではない。それに気づいたのは十年間肌身離さず持っていた「遺灰」ではなく、かつて二人が通った学校を目にすることだった。それは彼女の遺灰が、「生きているアキ」を「ぼく」に思い出させるものではなく、示している。

第五章で特徴的なのは「世界のはじまりと終わり」に在るとされる「アキ」である。

「ぼく」が「世界」について考え始めたきっかけは列車内の「アキ」

との会話だった。あの会話があったからこそ、「ぼく」は自分が「アキがいる世界」にしかいなかったことに気づき、「アキがいない世界」で「アキ」の死を考え続けることができた。「ぼく」にとって「世界」の始まりに「アキ」がいたということだ。

では、「ぼく」にとつての「世界」の終わりとは何か。

「世界」とは、列車内の会話をきっかけにその存在に気づき、思索を行わなくては存在しえなかったものである。ゆえに、「世界」の終わりとはその思索を終える時であり、「死」を擬似的にはなくそのままに経験することでもある。

「世界のはじまりと終わり」にいとされる「アキ」とは、「ぼく」の人生の根幹を決定する「きっかけ」であり、その人生の終着点と形を同じくするものなのである。

これまでの考察から、「アキ」が変容しながら、物質としてではなく、身体を超えたものとなったということが言える。

この「アキ」の変容とともに、「ぼく」の内面には成長が見られる。「ぼく」の「世界」における「アキ」の存在の変容を可能とさせたのは、「ぼく」の精神の成熟であろう。その成熟とは、「アキ」の死をきっかけとして「世界」を思索した結果である。

## 5

本節では(D)地点における手記の作者である「ぼく」と、それぞれのエピソードに描かれる「ぼく」との違いを考察したい。

その違いとして、第五章における散骨の経験の有無が挙げられる。

散骨を経験しているのは、第五章における「ぼく」、(D)地点にいる「手記」の作者の「ぼく」のいずれかである。しかし、第五章における「ぼく」は第五章の散骨時点現在進行形で経験していると言える。そのため、アキの遺灰の散骨を済ませた後にいるのは、(D)地点の「ぼく」のみに限定することができる。このことは、「アキ」の物質的存在が消えた地点にいるのは、(D)地点の「ぼく」だけであることを示している。

それでは、「アキ」が全く存在しない地点から、過去の体験を「手記」としてつづることにはどのような意味があったのか。

鈴木氏は次のような見解を出している。

アキの死から十年を経た後に、なぜ朔太郎は十年も前の過去のアキの思い出を書く必要があったのか。言い換えるならば、朔太郎はアキの死から十年を経て新たな女性と出会い、その女性との恋愛⇨人生へと突き進んでいくために、自らの過去の壮絶な体験を回想し、それを書き記す必要があったのではないかと思われる。アキとの恋愛と死を体験したことの意味を内面化しなければ、二〇代後半になった朔太郎は、新たな生の場所へと進み出ることができなかったのだ。

鈴木氏は手記を書き記したのは第五章において登場した「女」と「新しい生の場所へと進み出る」ためのものであると同時に、「ぼく」が「アキ」の死によって体験したことを内面化するものであるという。

ここで問題となるのが十年後の女性の存在である。十年後の「ぼく」が女性に対して「祖父」の話をしていること、共に故郷を訪れているという事実などから考えると、「ぼく」と女性は非常に親し

い関係であることが予想される。

その一方で、女性を「若い女」と表現する箇所、登り棒に挑戦する「女」をアキの存在によって塗りつぶすような叙述が見られるなど、不可解な点がある。

鈴木氏が言うように、「女」と共に歩むための儀式として「アキ」の存在の内面化を望んだならば、十年後の女性はより好意的に書かれてよいのではないか。なぜ女性は、あえて淡白な叙述で書かれるのか。

本作は(D)地点にいる「ぼく」による手記である。この手記は「アキ」と「アキ」の死によって変化した「ぼく」について書くことを主目的としている。「ぼく」の変化に焦点をあてて考えると、十年後の女性との出会いが、「アキ」を亡くした「ぼく」にとつて、大きな転機となっているであろうことが読み取れる。「ぼく」の人生において大きな意味を持ち得たからこそ、ここではその性質が隠されたのではないだろうか。

後年において、「ぼく」の大切な人となりえた人間をあえて登場させ、その存在が持つ価値を隠すことは、間接的に「アキ」の存在価値を高める効果がある。同時に、(D)地点の「ぼく」はこのような手法を用いることができるまでに成熟を果たしていた。

では、「アキとの恋愛と死を体験したことの意味を内面化」という点に関してはどうか。

手記としての性質のよりどころである一章六節の(D)地点の「ぼく」の叙述の直後には、「母から聞いた話では、祖父の会社は高度経済成長の波に乗って順調に成長し、祖父たち一家は傍目にも裕福な暮らしをしていたという」ように伝聞による記述となっている。

この叙述から(D)地点の「ぼく」は読者を意識していたとする方が自然であろう。

(D)地点の「ぼく」が書いた「手記」とは、「内面化」という個人的な行為にとどまるものではなく、他者の存在への発信が読み取れる。

ここで『DNAに負けない心』の一節を引用したい。

美しいという感覚は制御しえない世界からやって来る。制御しようとした途端に、それは消えてしまう。なぜなら「美しい」とは、この世界を他者に供するとき、はじめて自己に訪れる感覚だからである。目の前にある食べ物を、大切な人にそつと差し出したとき、わたしたちははじめて「おいしい」という感覚を手に入れた。一つの食べ物が、制御すべき対象物から超出して他者へと供されたとき、私たちは味覚を超える「おいしい」感覚を手に入れた。同じように凡百の風景のなかに、他者へ差し出すにたる意味や価値を見いだしたとき、私たちはそれを「美しい」と感じることを始めたのである。

人間にとつて、世界とはそのようなものである。私は他者と一つの世界を共有している。そのようなものとして、世界は美しくないことなど、ありえない。美しいものは所有できない。ただ享受することだけができる。

この小説の「ぼく」と「アキ」の関係とは、「ぼく」の人生の源にある、「ぼく」の「世界」を形作るものである。(D)地点における手記の作者である「ぼく」は、自身の人生においてもつとも根源的な「アキ」の存在を他者に供することができる手記の形態へ変化させることで、他者との共有を図ろうとしたのではないか。最も大

切な思い出である「アキ」との日々、およびその「死」を乗り越えていった「ぼく」の日々を他者と共有することで、その経験を「美しい」ものへと変化させようとしたように思える。

物語のラストに「ぼく」は「生きているかぎり、肌身離さず持っているつもりだった」遺灰を撒く。これは「アキ」が物質としても存在しない地点へと足を踏み入れる行為である。これは「所有」することから脱却とも言えよう。さらに『DNAに負けない心』において、片山は次のようなことを記している。

所有はどこまで行っても空虚である。生の充実は享受のなかにしかない。資本主義に鍛えられて、私たちは所有することに長けてきたが、享受することにかんしては、まだまだ未熟である。

遺灰を「所有」していてもアキの存在をぼくに思い出させることはなかった。むしろ片山が主張しているように、「所有」することによってアキの存在は時間とともに空虚なものへと変貌してしまった。第五章で「ぼく」が「アキ」の存在を発見するのは、自らが「所有」していないものに対してである。第五章の散骨は、「アキ」の存在からの解放というよりも、「ぼく」自身を「所有」の概念から解放したものと捉える必要があるだろう。

この「所有」からの解放を途中で唯一経験した(D)地点の「ぼく」が行う手記の執筆とは、女のことを思ってアキの存在と自身の人生を内面化することではなく、「所有」から解放されたところにある「美しいもの」としてのアキとの日々を他者に供することではなかったか。片山の『DNAに負けない心』の言葉をさらに続ける。

所有は「群れ」の行動様式であり、享受しうるのは「個」である。

「群れ」のなかで全人格的な力を分解された私たちは、生の不快感を埋め合わせるために所有に向かう。それに対して全人格的な力とともにある「個」は、所有を超えて自己の生を享受する。

(D)地点のぼくは、遺灰の「所有」から解放されることで「個」の行動様式を発見した。その発見によって導き出されたのが「手記」を書くことであった。手記を書くことは、「ぼく」自身の生を見つめ直すことである。それは自身が生きた人生の中の「ぼく」を他者とするので、「自己」の生を享受する「ことを可能にしているのである。

## 6

『世界の中心で、愛をさけぶ』の時間について考察してきた。「手記」としての性質をもちながらも、「手記」内部に描かれている過去の出来事は完全な過去としては描かれていない。語り手がエピソードの現在に寄り添うことによつて、それぞれのエピソードごとに現在を構成しているのである。その語りは「自己」の生を見つめ直すにあたって、「ぼく」が行った自身の「生」の再体験の軌跡だったのだろう。

「ぼく」は手記の中で、オーストラリア訪問地点の「ぼく」として「アキがいる世界」から「アキがいない世界」、「実体のないアキがいる世界」までの変遷を再体験する。これはまさしく、「ぼく」が行った「世界」と「アキ」の存在についての思索を見つめ直すことである。

しかし、そのみを目的とするのであれば、本作に「手記」とし



ての性質を持たせなくともよい。その性質を提示した真意とは、他者へ本作を供することだったのではないか。他者との共有の可能性を示すことで、「アキのいない世界」における「ぼく」の中の「アキ」にまつわる思索は、「ぼく」を超えて「美しいもの」へと昇華する。つまり、本作の構造の根底に、「ぼく」自身の体験を他者と共有する意志を見出すことができるのである。この昇華の構造は、『DNAに負けない心』に記されている片山の現代社会への批判に裏打ちされたものといえるだろう。片山自身が時代に向き合い、その理念を投影し得たからこそ、人々の心を掴むことができたのである。このことは、ぼくを手記として記録することが自身の成長と「美しいもの」への昇華の軌跡となった。この「美しいもの」へ人々は激しく反応したのである。

【参考文献】

- ・片山恭一 『世界の中心で、愛をさけぶ』 小学館・二〇〇一年四月
- ・片山恭一 『DNAに負けない心』 小学館・二〇〇〇年十月
- ・片山恭一 「なぜ恋愛小説を書くのか」 『小説tipper：トリッパー』 二〇〇三年（冬季）
- ・ライターズ・ジム 『謎解き『世界の中心で、愛をさけぶ』』 夏目書房・二〇〇四年四月
- ・雑誌 『ダ・ヴィンチ』・メディアアクトリー・二〇〇四年四月
- ・『7つの疑問で読み解く『世界の中心で、愛をさけぶ』』 メガヒット現象』・週刊朝日・一〇九（二三）（通号 四六二二）・二〇〇四年五月

- ・『世界の中心で、愛をさけぶ』 驚異の三〇〇万部突破！ 世も末？ それとも快挙？ セカチュー現象を探る』 『創』 三十四（七）（通号 三八二）・二〇〇四年八月
- ・上田 穂積（引用）の文法片山恭一の文学趣味』 『徳島文理大学比較文化研究所年報』 二二号・二〇〇五年三月
- ・上田 穂積（固有有名）としての物語——片山恭一「世界の中心で、愛をさけぶ」を読む』 『徳島文理大学研究紀要』 六九号・二〇〇五年三月
- ・『7つの疑問で読み解く『世界の中心で、愛をさけぶ』』 メガヒット現象』・『週刊朝日』 一〇九（二三）（通号 四六二二）・二〇〇四年五月
- ・片山恭一 『世界の中心で、愛をさけぶ』 小学館文庫・二〇〇六年八月
- ・鈴木正和 「現代の恋愛小説 世界の中心で、愛をさけぶ」 岩淵宏子、長谷川啓編 『ジェンダーで読む愛・性・家族』 東京堂出版・二〇〇六年十月
- ・大沢正善 「『世界の中心で、愛をさけぶ』論」 『岐阜聖徳学園大学国語国文学』 二十六号・二〇〇七年三月
- ・秋枝（青木）美保 「宮沢賢治と現代文学（その3）「銀河鉄道の夜」と「世界の中心で、愛をさけぶ」における死生観——ジョバンニとカムパネルラの変奏」 『福山大学人間文化学部紀要』 八号・二〇〇八年三月
- ・片山玲子 『皮てんぷら』 から『世界の中心で、愛をさけぶ』まで』 文芸社・二〇〇九年十月